

氏名	谷垣 千沙		
ヨミガナ	タニガキ チサ		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博音第287号		
学位授与年月日	平成29年3月27日		
学位論文等題目	〈論文〉	作曲家たちの見たオフェーリア —— ヘルマン・ロイター《オフェーリアの3つの歌》を中心に ——	
		H. ロイター オフェーリアの3つの歌	
	〈演奏〉	日暮れ、小さな受難曲、3つの河の小さなバラード	
		J. F. ライヒャルト、F. シューベルト、R. シューマン、H. プフィツナー 他	
論文等審査委員			
主査	東京藝術大学	教授	（音楽学部） 菅 英三子
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部） 檜山 哲彦
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部） 吉田 浩之
副査	東京藝術大学	名誉教授	（音楽学部） 寺谷 千枝子
副査	東京藝術大学	名誉教授	（音楽学部） 多田羅 迪夫

（論文内容の要旨）

世界中で愛され続けてきた悲劇の少女、オフェーリアが歌う「オフェーリアの歌」に焦点を当て、そこに作曲家たちがどう楽曲を創作したのか探ることを、本論文の軸とする。

オフェーリアとは、ウィリアム・シェイクスピア（1564-1616）によって16世紀初頭に書かれた、戯曲『ハムレット』に登場する少女である。しかし彼女は運命に翻弄されて激しい錯乱状態に陥り、やがては死を迎えてしまう。そのような彼女は演劇界に留まらず、絵画、音楽の世界にも大きな影響を与えた。そして、原語である英語に限らず、その他多くの言語、多数の作曲家によって、いくつもの「オフェーリアの歌」が作曲された。

ドイツ語で作曲された歌曲で有名なものに、リヒャルト・シュトラウス（1864-1949）の《オフェーリアの3つの歌》Op. 67, 1-3 が挙げられる。他には、その約80年前にヨハネス・ブラームス（1833-1897）が作曲した《5つのオフェーリアの歌》がある。また、近現代の作曲家、ヘルマン・ロイター（1900-1985）による《オフェーリアの3つの歌》は、彼のオペラ《ハムレット》より派生したものだ。

ヘルマン・ロイターとはドイツの作曲家であり、また、コンサート・ピアニスト、歌曲ピアニスト、音楽大学で作曲法や歌曲解釈を教える教師でもあった。20代前半のロイターの作品には、新ロマン主義のような響きを感じられるが、それは次第に影を潜め、前衛的なものになっていった。しかし戦後は、複調性など彼の作品の特徴を残しつつも、伝統的な作曲技法に戻ってきた。そのような作曲家、ロイターが人生の約半分の歳月をかけて取り組み、作曲した作品がオペラ《ハムレット》だ。

シェイクスピアの『ハムレット』は、父親の敵を討つため叔父への復讐を誓う、デンマークの王子、ハムレットを取り巻く物語だが、最後には登場人物のほとんどが、殺し殺され、死んでしまうという悲劇である。その中でオフェーリアは恋人であるハムレットに、自分の父親を殺され、正気を失う。その狂乱の場面で彼女によって歌われるのが「オフェーリアの歌」だ。その場面が終わった後、オフェーリアは川に流されて死んでしまう。

そのシェイクスピアの戯曲『ハムレット』は1800年頃にドイツでも流行し、多くの翻訳本が発行された。そのなかでも、アウグスト・ヴィルヘルム・フォン・シュレーゲル（1767-1845）のドイツ語による翻訳は今日も親しまれている。そのシュレーゲルの翻訳を使用して作曲されたロイターのオペラ《ハムレット》は、「音楽のための劇」と副題が付けられ、また、曲中の独唱箇所にも挟まれて、ときおり台詞などが入れられるなど、シェイクスピアの演劇であることが強調されている。

オペラではないが、演劇の舞台上で歌われるためにブラームスによって作曲された《5つのオフェーリアの歌》は、民謡のような調べで、喜ばしい内容のテキストには悲しい音楽が、憂鬱な内容のテキストには朗らかな音楽が用いられた。それに対して、シュトラウスとロイターは、調性をあいまいにしてオフェーリアの狂気を作曲した。また、ロイターは複調性を多く用いることで、オフェーリアの分裂した感情を表現した。

作曲技法に相似する点が多い、シュトラウスとロイターの作品だが、大きな差異は戯曲『ハムレット』中のオフェーリアによる台詞が、楽曲内に組み込まれたか、そうでないかである。その台詞の多くは、戯曲の中の他の登場人物に語りかけられるものだ。その台詞の箇所を取り入れたロイターの作品は、ピアニストと共に、舞台上、独りで歌唱する「歌曲」であるにも関わらず、あたかも周りに誰か人物が存在するような気がするのだ。これは他の2作曲家の作品の否定を意味するものではないが、演奏者には大きな助けになることは明らかだ。

この台詞の有無以外にも、ブラームス、シュトラウス、ロイターらは多くの作曲技法をもって狂気の少女、《オフェーリアの歌》を作曲した。その作曲の方法と、オフェーリアの本来の性質、何が物語のなかで起こったか、これらを十分に理解したとき、その歌唱方法は演奏者に委ねられるのだ。

（総合審査結果の要旨）

「作曲家たちから見たオフェーリアーヘルマン・ロイター《オフェーリアの3つの歌》を中心に」という題目で書かれた学位論文は、三章から構成されている。ヘルマン・ロイターの生涯と作品をたどった第一章では、ピアニスト、作曲家としてのロイターの姿を描き出し、彼の作品群、歌曲作品、《ハムレット》について考察を行っている。また第二章では、ヨハネス・ブラームスとリヒャルト・シュトラウスの《オフェーリアの歌》を取り上げ、ロイターのものに合わせて3人の作曲家の《オフェーリアの歌》について楽曲分析を行っている。続く第三章では、第二章での考察に基づいてそれぞれの楽曲の比較を行い、演奏の可能性を探っている。日本ではまだ取り上げられることの少ないロイターについての資料をよく集め、ブラームスの楽曲の分析にも独自性が見られるなど、非常に興味深い内容の論文となっている。またシェイクスピアの戯曲

のドイツ語訳の比較なども丹念に行っており、この論文が力作、労作であることを窺わせる。他方、論述内容の視点は意義深いものであると認められるものの、演奏に結びつけて考察しようとする論文の最終部分においては十分にまとめきれていない感が拭えない。しかしこの点を考慮して更に考察を進めるならば、より完成度の高い研究となることであろう。論文の構成、論点などの骨格はしっかりとしており、十分に学位取得に値する論文であると認められる。

学位取得審査の演奏会は、前半はドイツ・リートの流れを大きく捉えるプログラムとしてライヒャルト、シューベルト、シューマン、ブラームス、プフィッツナー、ツェムリンスキー、レーガーの歌曲で構成し、後半はチクルスのように並べたゲーラーの歌曲群と3つのオフェーリアの歌を含むロイターの歌曲群という、非常に意欲的な演奏会であった。それぞれの歌曲を演奏している際の表情、発語、音楽的表現など、演奏家としての今後の歩みにも関わってくるであろう課題も垣間見えたが、全体を通して演奏水準は高く、ドイツ歌曲史的な前半、多様な表情を見せたゲーラー、学位論文の研究内容と深く結びついたロイターなど、これまでの研究の成果を十分に披露する演奏であった。

以上の所見により、審査委員会において協議を行った結果、合格であると認める。